

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

全学教務委員会

(責任者名) 新田 雅子

(役職名) 教務部長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	令和3年度から開設し、指定科目の履修者と単位修得者数は毎年全学教務委員会で報告を行っている。履修者数については徐々に増えているが、修得者数が伸び悩んでいることから、このプログラムを修得することの意義等について更なる周知を行う必要がある。
学修成果	日々の授業では、LMSを通じて小テストやリアクションペーパー(相当のもの)を活用することで、学生の理解度を把握することができる。 また、毎年実施している授業評価アンケートにより授業内容を振り返り、学習・教育目標の達成度の自己評価を行うことが可能だが、回収率が低いため、大学全体で改善に向け検討中である。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	毎年度実施している授業評価アンケートの「確実に学習したか否か」の問に対し、「コンピュータサイエンス概論」は全員が70%以上と回答、「データサイエンス概論」では1名を除き全員が100%と回答している。自由記述欄への記載内容からも、「LMS(Moodle)に資料等を掲載することで理解を深めることができた。」「講義後に行う小テストやリアクションペーパーは授業の復習にもなりとても良かった。」などの意見が寄せられている。ただし、これらはプログラムを修得できた学生の意見であり、アンケート回収率も低いことからその向上について改善を図る必要がある。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	全学的に実施している授業評価アンケートでは、後輩等他の学生への推奨度を問う項目は設定されていないが、授業中に教員から後輩への推奨や、年度初めの教務ガイダンスにて本プログラムの紹介を行っている。 今後、本教育プログラムの科目を対象とした独自のアンケートの実施も検討し、後輩学生への推奨度等の調査も検討する。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	プログラム科目は卒業必修要件とはなっていないため、履修率が低い状況である。令和6年度からは履修要項に本プログラムについて掲載を行い、教育支援課の行うガイダンスを通して説明を行い、履修を促すこととしたい。 また、令和6年度からは、遠隔授業開講及び複数クラス開講とし、キャンパスに関わらず、多くの学生が履修・学修可能となるように進めている。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
<p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p>	<p>本プログラムは令和3年度に開始し、令和6年度末に最初の卒業生を輩出することとなるため、現状では本プログラム修了者の進路調査・活躍状況調査・企業からの評価は実施していない。 プログラム終了生並びに主な就職先である企業等に対する評価調査については、今後検討をする。</p>
<p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>現時点では、産業界や外部からの評価について、調査を行っていないが、調査方法も含めて検討を行う。</p>
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>リテラシーレベルの導入に準じた内容を中心に、また常に身近な例を引きながらデータサイエンスの適用事例やAI等の活用を中心に、興味を持つ講義内容としている。 例えば受講生の中にスポーツ競技をしている学生がいる場合は、その競技で得られる様々なデータから特徴的なことの紹介、身近なところではPOSデータのしくみやそのデータの使われ方などを、意識的に取得するデータと無意識で採取されるデータが世の中には多くあることを紹介している。またそれらがどのように分析され、利用されているのかを常に意識させながら授業展開している。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>モデルカリキュラムを常に確認するとともに、授業時のリアクションペーパーや授業評価アンケートの学生の意見を参考に、わかりやすい授業が展開するよう講義内容の見直しを図り、絶えず授業改善に努めている。またAIやデータサイエンスの分野は日々発展しており、学術研究の進展と世の中での使われ方などをいつも確認し、それを授業で反映できるようにしている。 本学は文系総合大学で数学的・理系的な話が不得手な受講生が多いため、意識的に身近な例を示しながら授業展開している。</p>